

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520369

研究課題名(和文) 初期資料から見るルターの思想構造

研究課題名(英文) The Structure of Luther's Thinking - seen from the Early Documents

研究代表者

松浦 純 (Matsuura, Jun)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：70107522

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：ルターの思想構造を生成から捉える基礎研究。最初期(1509-11)資料研究・エディション(2009刊)を踏まえ、次いで古い現存資料「第1回詩篇講義」草稿(付加を含め1513-16)の分析(筆跡、インク、紙質・透かし等)により、テキスト成立順の研究を進めた。成果の一部は、ドイツで宗教改革の里程標となった諸文書を解説する単行本の中で既刊。また1520年に提示された聖書解釈原則「聖書は自らの解釈者」の成立過程と内実を明らかにし、本年ドイツで刊行予定の論集に寄稿。さらにメランヒトンの聖書注解への注記(1536年頃)の初エディション(初期資料を顧慮した注解付)が、ドイツの「ルター年鑑」本年号掲載予定。

研究成果の概要(英文)：Fundamental investigations into the structure of Martin Luther's thinking from the viewpoint of its making. Continuing my studies of the earliest documents (1509-11) with their complete edition (AWA 9, 2009) the existing next-early documents (the 1st Lectures on the Psalms, 1513-16 including additions) have been codicologically and philologically analysed as to handwriting, inks, paper quality, watermarks etc., in order to single out the periods of the manuscript more precisely. The results are partly published in a German book on the Milestones of the Reformation. The hermeneutical principle "Scriptura sui ipsius interpres" put forth in 1520 against the Papal hegemony has been traced back to the early documents with a new insight into its core meaning (an article in a forthcoming volume of essays in Germany). The continuity of his thinking could also be shown in the first edition of the annotations zu Melancthon's commentaries on Paul (ca. 1536), forthcoming in Lutherjahrbuch 2014.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：Martin Luther 西洋思想史 キリスト教史 宗教改革 資料分析 ドイツ文学史

1. 研究開始当初の背景

(1) ルターの思想の中心を捉えるうえで、ごく大づかみに言えば、のちにプロテスタント・ルター派教会の正式な文書として位置付けられた後期の文書を出発点とする方向と、逆に「宗教改革者」として登場する以前の初期資料から出発して思想構造の特質を捉えようとする方向がある。その初期資料の解釈も、基本的な視点を初期資料そのものに置かず、後期資料に置くかで大きく異なってくる。

(2) 筆者は初期資料を出発点とする立場に立ち、そこから思想の生成を捉えてゆくべく、1980年代前半から最初期資料(エルフルト期、1509-11)の資料発掘・校訂・注解の仕事を進め、その成果を2009年末にドイツで公刊した。この仕事の継続として、次の時期の現存資料、とりわけ第1回詩篇講義ルター校訂テキストと注解自筆草稿(1513-15、付加を含めれば1516まで)の研究が課題となっていた。

2. 研究の目的

(1) ルターが後年、自分の決定的な転換点として「神の義(正しさ)」概念の新理解を挙げたことから、それを獲得した時期とその内実の問題が初期ルター研究の最重要課題の一つとなってきた。その際、内実に関しては、ルターが新理解だとした理解は実は中世神学の常識だった、というカトリック側からの批判(20世紀初頭)が、中世の伝統との詳細な比較を必須のものとした。また、内実の問題とかかわりつつ特に時期の問題について解釈がもっとも争われてきたのが、第1回詩篇講義草稿だった。新理解はこの時期に獲得されたのか、あるいはこの時期、ルターはまだ古い理解に留まっていたのかという問題である。さいわいこの草稿の新校訂版は2000年に完成している。したがって、それを利用しつつこの資料と新たに取組む中で、「神の義」の新理解と呼ばれているものの獲得時期と内実を捉えなおすことが、当研究の第1の目的である。

(2) 決定的な転換点は、ルターの場合、単なる通過点ではなく、たえずそこへと立ち帰る原点とも言うべきものだった。したがってそれを捉えなおすことは、彼の思想の中心あるいは「思考の場」を捉えることを意味する。この「思考の場」は「他の人格存在を前にした人格存在」という構造を持つと考えられ、存在論的な反省とも、我が国で「人前」や「世間の目」と呼んでいるような日常生活の意識構造ともつながる問題としてその内実を追究すべきものである。当研究はそれを長期的な目的とした基礎研究である。

3. 研究の方法

(1) 20世紀にはいって本格的に始まった第1回詩篇講義自筆草稿の研究史は、研究の新段階がとりわけ草稿そのものの古文書学的・文献学的研究によってもたらされてきた

ことを示している。殊に16世紀以来1冊に綴じて伝承されてきたスコリア冊子(Scholienheft)いわゆるドレスデン手稿の内容が、成立順に並んだものではなく、冒頭に後年(1516年)の草稿を含んでいることの解明(主に1920年代の研究)は、解釈の根本的な変更を迫るものだった。本研究は文献学的研究を基本としながらそのような古文書学的問題をも追試・再分析すべく、ドレスデン手稿、ヴォルフエンビュッテル手稿(ルター校訂による詩篇テキスト刊本およびそれへの自筆注記)それぞれの原本にあたって、筆跡、インク、紙質、透かし等によって詳細な分析を試みた。

(2) 「義」、「裁き」、「自己告発」、「へりくだり」など、両手稿で基本概念となっているものの手稿内での分布と文脈、また内実を文献学的に精査し、手稿の古文書学的特徴と照合して分析した。

(3) そのような概念が中世の伝統の中でもっていた意味と位置を、ラテン教父全集などを用いて確認した。

(4) 「研究の目的」(1)に挙げたように、「神の義」の新理解を転換点として挙げているのは、後年、具体的には1530年代以後の資料である。そういった資料を分析し、「第1回詩篇講義」と突き合わせた。

(5) 「第1回詩篇講義草稿」およびそれに続く「ロマ書講義草稿」等に見られる思想・思考がその後どのように引き継がれあるいは展開されたかを見た。

4. 研究成果

(1) ヴォルフエンビュッテル手稿には、箇所によってインクや筆跡にさまざまな相違がみられ、付加部分が確認できる場合があるほか、どの詩篇に特に繰り返し注記が行われたか、といったことを見て取ることができる。また、手稿の伝承史に関してもいくつかの知見が得られた。

(2) ドレスデン手稿(スコリア冊子)は、元来ルターが綴じずに手許において、追加、差し替え等を行ったものが、のちに綴じられたものである。そのため、各部分の成立順序は一部を除いて必ずしも明らかではない。しかし、筆跡、インク、記入の流れ等が、記入時期の相違等を示唆する場合も少なくない。また、用紙の基本的な交替については既に1920年代の研究が明らかにしていたものの、その透かしを詳細に比較すると、基本的に同じ透かしであり同じ用紙である場合でも、変形など微妙な差異を示している。したがって同じ透かしの入った用紙に書かれた部分であっても、綴じられた順に成立したとは断言できず、時期を微妙に異にする可能性があることが確認された。(なお、この両手稿についての資料研究・伝承研究の一端は、宗教改革の里程標となった書物を解説した単行本の中で公表された。図書1参照)

(3) したがって、概念や記述の仕方が特徴的

な分布を示している場合、その事実は、そのような古文書学的分析と突き合わせたうえで、成立順序の解明に寄与しうる。

(4)「神の義」の新理解について述べる 1530 年代以降の回想は、「神と人の認識」というテーマとつながる形で為されている。そして後者こそが「第 1 回詩篇講義草稿」で中心的な地位を占めていることから、分析に際して「神の義」概念だけでなく「神と人の認識」に特に注目する必要がある。すなわち、それに関する新理解が、後に「神の義」の発見ないし新理解として述べられているのではないかと考えることが出来る。

(5)この「神と人の認識」のあり方を中世の伝統と突き合わせると、人間に与えられる神の「恵み」の認識こそが人間の「罪」の認識に至らせる、すなわち「恵み」が絶対的に先行する、という点が決定的だったのであり、それが「神の義」の新認識(「人間を義とする義」としての「神の義」)として把握された、という仮説が立てられる。つまりそういう形で、第 1 回詩篇講義中に、後の回想に言う「神の義の発見」があり、それが草稿中に確認できる、と考えられる。

(6)のち 1520 年、すでに破門威嚇教書を発布されたルターが、その根拠となる教皇の権威による聖書援用と闘う中で決定的な形で提示した、「聖書は自らの解釈者である」という解釈学的原則も、「第 1 回詩篇講義」に見られる思考の特徴である、矛盾・対立とその一致、という構造に根を持っていることが示される。これについては 2012 年の国際ルター学会分科会で発表し、論文にまとめたものは今年ドイツで刊行予定の図書で公開される(図書 2 参照)。

(7)また、1536 年頃、メランヒトンの「ロマ書注解」欄外にルターが付した注記にも、1515/16 年の「ロマ書講義」の該当箇所と同じ理解がみられ、ここでも初期の思考が持ち続けた継続性が確認できる。この注記は 1988 年発見されたものの解読されずにいたものであるが、2011 年および 2012 年の現地調査によって解読し、詳細な注解を付したエディションとしてまとめた。これはドイツの「ルター年鑑」2014 年号に掲載される(雑誌論文参照)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

(1) Martin Luther: Annotationen zu Melancthons Pauluskommentaren (um 1536). Text und Kommentar, in: Luther Jahrbuch 2014 [マルティン・ルター メランヒトン著パウロ注解への注記(1536 年頃) - 本文と注解、「ルター年鑑」2014 年](印刷中)

〔学会発表〕(計 2 件)

(1) „Zum Wolfenbütteler Psalter als Reformationsdokument und Weltgedächtniserbe“

Das Erbe der Reformation Martin Luthers in Dokumenten. Expertengespräch, 2012.2.17, Mainz (Germany), Institut für Europäische Geschichte. [「宗教改革ドキュメントと世界記憶遺産としてのヴォルフエンビュッテル詩篇」、マルティン・ルターの宗教改革遺産ドキュメント専門家会議、2012 年 2 月 17 日、マインツ(ドイツ)、ヨーロッパ史研究所]

(2) „Duo Cherubim adversis vultibus. Zur Herausbildung der neuen Hermeneutik als Voraussetzung für die Konzentration auf die Schriftautorität“

12th International Congress for Luther Research

2012.8.6. Helsinki University (Finland) [「向かい合った 2 人のケルビム - 聖書の権威への集中の前提としての新解釈学の生成」、第 12 回国際ルター学会、2012 年 8 月 6 日、ヘルシンキ大学(フィンランド)]

〔図書〕(計 2 件)

(1) Irene Dingel und Henning Jürgens (edd.): Meilensteine der Reformation. Schlüsseldokumente der frühen Wirksamkeit Martin Luthers, Gütersloh 2014 (pp. 28-47 & 244-252; Jun Matsuura: Psalterdruck und Manuskripte zu Luthers Psalmenvorlesung 1513-15. Ihre Wege durch die Geschichte) [イレーネ・ディンゲル、ヘニング・ユルゲンス編『宗教改革の里程標 マルティン・ルターの初期の活動のキー・ドキュメント群』ギュータースロー 2014 年、うち 28-47 および 244-252 ページ「ルターの詩篇講義(1513-15) 詩篇テキストと手稿 - その辿った道程」を担当]

(2) Volker Leppin (ed.): Aatorität und Autoritäten beim jungen Luther (Jun Matsuura: Duo cherubim adversis vultibus. Zur Herausbildung und texthermeneutischen Bedeutung des Grundsatzes Scriptura sui ipsius interpres) [フォルカー・レッピーン編『初期ルターにおける権威と諸権威』、うち「向かい合った 2 人のケルビム - 解釈原則「聖書は自らの解釈者」の生成とそのテキスト解釈学的意味」を執筆](印刷中)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松浦 純 (Matsuura, Jun)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号:70107522

(2) 研究分担者

(なし)

研究者番号：

(3) 連携研究者

(なし)

研究者番号：